

国のかたちを
考える

従来の常識では計り知れない異常気象が頻発している。国土交通省の交通政策審議会、社会資本整備審議会などの委員会に席を置いているが、この10年の審議を振り返っても、豪雨や豪雪、猛暑などを含めた自然災害への対応が議論のテーマとなってきた。こうした気象状況を異常ではなく恒常と呼ぶ日も近づいている

フリーキャスター、千葉大学客員教授

木場 弘子氏



卒部を社。一の、昨
学入スタ現在、務
学チャ多にめ
とツ」ンを取
教とキラー資格
育しなスバ格
学ポスーリンバ
大サポスーリンバ
千ウ性ニフメ
コナ女ユフメ
アの也1992議会
ろに初築当。審指
S同局紫。審指
Bは「担省防
Tは「担省防
後、中してを予
業在と番組つに

災害時に生きるコミュニケーション

よつに思える。一人一人が自らの命をどう守るかについで真剣に考え、災害時に判断を求められる時代になったと言えよう。

災害時にはハード面での対策だけでなく、地域のコミュニケーション力というソフト面での備えも欠かせ

ない。最近個人情報の保護やプライバシーを重視し過ぎていいるせいか、近所の顔や名前も知らないという人たちも多い。しかし、災害が起きた時に地域の人が助け合ったりする、助け合ったりすることは大きな防災力となる。

強い、災害時に「あの人はどうしているか」などと思いをはせることができる。そんな長屋感覚も大事ではないか。

地球温暖化や防災などの対策を充実させていく上で、相手にとのような国や自治体による広報の重要性に異論を挟む人はいだろうか。だが、現状では

ばならないので、時に煩わしさも伴うが、人とのつながりを築いていくためには大切なものだ。私自身、高齢化が急速に進み、1人暮らしのお年寄りも増えていの中で、受け手側の視点に立ったきめ細かな広報を求めたい。

国交省が2013年度に「社会資本メンテナンス年」として総合的なインフラ老朽化対策を打ち出した。これからの建設市場も新規建設から維持更新の時代にシフトしていくことになる。老朽化が原因で事故が起きぬことを切に願う。そして、自然災害に対しても粘り強く対応できる構造物を維持・管理していただきたい。きちんとしたメンテナンスがなされ、安全が担保されることで私たちも安心して暮らしていくことができる。建設産業には、社会基盤づくりの中核としてICT(情報通信技術)やAI(人工知能)なども活用して技術力を高めながら、メンテナンス事業などでもこれまで以上に社会へ貢献していくことを期待したい。